

02/

日蓮正宗
青年僧侶改革同盟

化儀の 正しい意義 について(葬儀編)

はじめに

今回の宗門事件で、

宗門は「葬儀に僧侶を呼ばなければ成仏しない」と主張し、
創価学会の友人葬を非難しています。

しかし、釈尊は、入滅にあたって「僧侶は私の葬儀にかかわるな。

それより修行に専念しなさい」と遺言し、

釈尊の葬儀は在家の信徒によって執り行われました。

なぜ、釈尊はこのような遺言をしたのでしょうか？

釈尊は、生老病死の四苦に悩む衆生を救済するため、
すなわち、生きる人々を救うために仏法を説きました。

苦悩にあえぐ人々をいかにして励まし、

自立した生き方を教え、

幸福の彼岸へと導いていくか。

そこに仏教の原点があるからです。

ですから、釈尊は弟子に対して、「葬儀」に関わらずに、

生きている人を救うために行動することが

僧の使命であることを教えようとしたのです。

1 「生きる人を救う仏教」が 「葬式仏教」になったのは、 江戸時代の「檀家制度」から

生きている人々を救済する仏教の出発点は「葬儀」とは無関係であり、日本においても、仏教はやはり「葬儀」とは関係ありませんでした。日蓮大聖人の時代も、大聖人が信徒の葬儀に参列した例はありません。

現代の日本の葬式仏教は、仏教の伝統ではなく、江戸時代の檀家制度の名残であるというのが、多くの識者の結論です。「寺請制度」によって、民衆がどこかの寺に所属するように義務づけられたところから、民衆を縛り付けるために新しい法要が生まれ、「葬式仏教」が日本に定着してきたのです。

2 葬儀に関する「御書」がないことを 認めていた宗門

平成三年に宗門は、葬儀に関する「通告文」なる文書を創価学会に送付しました。その中で以下のように、葬儀に関する御書がないことを認めています。

「創価学会では、大聖人の御書中に、信徒の葬儀に関する直接的な記載がないことを奇貨として、むしろ学会葬を奨励しているのであります」

このように、宗門も御書の中に葬儀に関する記述がないことを自分たちで認めていたのです。もし、葬儀が成仏に必要なことであるならば、大聖人が門下に述べられないわけがありません。

すなわち、大聖人の仏法と葬儀が無関係なということを宗門も承知しているうえで信徒を脅しているのですから、このうえなく、悪質です。

宗門が葬儀のことに執着するのは、自分たちの権威が失われ、供養が入らなくなることを恐れるからなのです。

3 御書の意味を都合の良いように 改変する宗門

ところが最近、宗門は「御書に葬儀の記述がある」と言いました。それは「忘持経事」の次の御文です。

「教主釈尊の御宝前に母の骨を安置し五臓を地に投げ合掌して両眼を開き
尊容を拝し歓喜身に余り心の苦み忽ち息む」(御書 九七七頁)

宗門はこの御文を引いて「富木殿は大聖人のもとで葬儀を営んだ」と言いました。

しかし、日蓮正宗の公式ホームページでは「富木殿は、その菩提を弔うため翌三月に、下総から、大聖人様のおられる身延の山に、その遺骨を奉持して登山し、大聖人様にその追善供養をお願いしました」と、葬儀ではなく、追善供養のこととして説明しています。

そして、この御書の内容について、「親子同時の成仏を説かれた『法華経』を身をもって示されたものと誉め称えられています」と親子一体の成仏の御指南だと解説しています。

葬儀を利用して信徒を脅す日蓮正宗は 仏法者失格

この宗門の解説の通り、この御書は葬儀とは無関係です。大聖人は富木殿に、葬儀による成仏ではなく、子供の信心で親が成仏することを教えられているのです。

「通告文」で宗門は友人葬のことを「大聖人の仏法と富士の立義を破壊する謗法行為」と言い、「即身成仏どころか必定墮地獄となります」と信徒を脅しています。

しかし、御書の意味を改ざんする宗門の行為こそ、大聖人の仏法を破壊する謗法であります。また、衣の権威で信徒を脅す、その無慈悲な言動は仏法者として許されるものではありません。

4 「即身成仏」の法門から言えば、 故人は亡くなるまえに成仏している

そもそも、葬送儀礼で成仏が決まるという主張そのものが、大聖人の教えに反しています。

日蓮大聖人は、「いきてをはしき時は生の仏、今は死の仏、生死ともに仏なり。即身成仏と申す大事の法門これなり」(御書 一五〇四頁) と仰せです。成仏とは、臨終や死後のことを指すのではなく、現世だけでなく来世においても、崩れることのない絶対的な幸福境界を築くことです。かつては、日蓮正宗でもそのように教えていたはずです。

「即身成仏」「一生成仏」の法門から言えば、広宣流布に励む人生そのものが成仏の姿であり、その証として、安らかな臨終の姿を現じるのです。

創価学会員の葬儀に行けば、誰でも分かることですが、葬儀が行われる前に、故人は安らかな相で「成仏」の姿を現じています。

5 葬儀は「親子一体」の成仏を 決意する場でもある

葬儀を遺族の側に立ってみれば、愛する肉親との死別は、だれもが避けては通れない苦しみだといえます。しかし、仏法では、まことの信心に立った肉親による心からの追善回向こそ、いかなる死者の生命をも仏界の軌道へと導き、必ずともどもに成仏していけると教えられています。

御書には「父母の成仏即ち子の成仏なり、子の成仏・即ち父母の成仏なり」(御書 八一三頁)と、親子一体の成仏が説かれています。

その意味では、葬儀は遺族の方々が、“自分たちが幸福になることによって、故人の成仏を証明していこう”と、信心の決意をする場でもあるのです。

おわりに

友人葬の意義は、真心の唱題による回向

日寛上人の「臨終用心抄」によれば、大切なことは臨終の前の心構えであり、臨終の直後に唱題を聞かせることです。

そういう意味では、最後まで激励してくれる同志がいることや、亡くなった後に追善の題目を唱えてくれる同志がいることは、本当に素晴らしいことなのです。

日蓮大聖人の御遺命たる広宣流布に励む人々が参列する友人葬は、真実の回向となる真心の唱題行が営まれるのですから、大聖人の御精神に最もかなった葬儀であるといえましょう。

実態1 関西では、通夜は学会の幹部が行い、僧侶は告別式にしかいないのが通例であった

今、宗門は「必ず僧侶が葬儀を執行しなければならない」と言っていますが、創価学会の草創の頃は、寺院が少なかったため、地方では僧侶の代わりに創価学会の幹部が葬儀を行っていました。

また、関西方面では所化の数が少なかったため、全ての葬儀を僧侶が執行することは不可能でした。そのため、今回の宗門問題が起こるまでは、通夜は創価学会の幹部が行い、僧侶は告別式だけに行く、というのが通例でした。

すなわち、葬儀はあくまでも化儀・習俗であり、成仏・不成仏とは関係ないことは暗黙の了解だったのです。それを今になって、過去の事実を無視して、「必ず僧侶が葬儀を執行しなければならない」などと言いだすのは、あまりにも無節操です。

実態2 通夜のことを野球に例えて 「ナイター」と呼んでいた宗門の僧侶たち

それでは、宗門の僧侶は一体、どのような態度で信徒の葬儀を執行していたのか。その実態はまさに僧俗差別の感情をむき出しにしたものでした。

東京の末寺には大学生の所化が多数、在勤していましたが、彼らは野球の試合に例えて、通夜のことを「ナイター」、告別式を「ディゲーム」と呼んでいました。

中には、「せっかく今日の夜は遊びに行こうと思っていたのに、ナイターが入った」と迷惑そうに言う僧侶もいました。

他にも、葬儀に行くのに御本尊をいつも忘れる者、毎回のよう葬儀で居眠りをしている者などもおり、その不謹慎な態度に、遺族の親類から苦情が出ることも度々ありました。

どの寺院の住職も、通常の葬儀には所化を行かせ、御供養の多い信徒の場合には住職自らが行くということも、よく聞く話でした。

宗門の僧侶がこのような不謹慎な行為ができるのは、「在家は僧侶よりも下」という差別観によるものであり、葬儀を、御供養を得るための「ビジネス」と捉えているからなのです。

成仏の肝要は本人の生前の仏道修行であること、また、真心の同志の回向に力があることは間違いありません。友人葬こそが、日蓮大聖人の仏法の本義に基づく最善の仏事なのです。

